

## 『青木昌彦の経済学入門 ——制度論の地平を拓げる』

青木昌彦 著



ちくま新書

評者 矢口和宏\*

本書は、比較制度分析 (Comparative Institutional Analysis) で世界的に著名な青木昌彦氏の経済学の入門書である。ただし、はしがきでも述べているように、青木昌彦による『経済学入門』ではなく、『青木昌彦の経済学』の入門書である (p.10)。本書は「制度論の地平を拓げる」というサブタイトルにもあらわれているように、比較制度分析入門としての性格をもっている。

本書は、筆者がこれまで日本語で行ってきた新聞への寄稿、学会等での講演、対談を中心にして構成されており、数式や難易度の高いゲーム理論を用いることなく、比較制度分析の本質を解説している。はしがきには、筆者による要約的な紹介が示されているが、以下に評者自身が魅かれた部分を中心にして本書の要約を示す。

第1章は「経済学をどう学ぶか」であり、筆者がどのように経済学と出会い、そして研究するようになったのかという自分史と、学生向けに経済学を学ぶ心構えを語った講演録からなっている。最初に筆者のカール・マルクスとの出会いと決別が語られ、マルクス経済学とは一番遠い所にあると思われる近代経済学の一般均衡論の研究に向かった軌跡が語られる<sup>1)</sup>。さらに筆者は、これから経済学を学ぶための心構えとして、3つのポイントを提示する。それらは、①論理的にもの考える道具としての数学、特にゲーム理論を学ぶこと、②国際的なコミュニケーションスキルとしての英語に強くなること、

\* 東北文化学園大学総合政策学部准教授

1) 学生時代、筆者の青木昌彦氏は「姫岡玲治」なるペンネームをもち、共産主義者同盟(ブント)の指導部に所属していた理論家肌の学生運動家であったことは有名である。

③近年、経済学と融合しつつある認知理論や脳科学に対しても目配りをする  
ことである。

第2章は「制度分析の考え方」として比較制度分析の基本的な考え方が紹介される。そのため本章は、比較制度分析の基本的なテキストとしての役割を果たしている。最初に筆者は、制度経済学で多大な貢献をしたダグラス・ノースやオリバー・ウィリアムソンの制度観を紹介し、比較制度分析の制度観との違いを説明する。

ノースやウィリアムソンは、制度はゲームのルールととらえるが、比較制度分析では「制度は、ゲームの内生的結果・均衡」(p.71)であるという立場をとる。そのため、比較制度分析では、制度はかならずしもフォーマルな法の形式をとるわけではない。なぜなら、法を強制化する立場にある者がルールを実行するインセンティブを欠く場合には、そのような法は制度たりえるかという問題が生じるからである。仮に制度をゲームのルールとしてとらえるのであれば、「法の自己拘束力はいかにして保証されるか」(p.71)という問題につきあたることを指摘する。

一方、比較制度分析では制度は均衡であるという立場をとるため、制度は安定的で拘束力がある。そのような解釈からは、決して法のようにフォーマルな形で明文化されてはいないが、長く安定的に続いてきた慣習も制度としてとらえられる。具体的には、日本経済の特徴として語られる終身雇用制やメインバンク制は、かならずしも法的に規定されたものではないが、比較制度分析の枠組みでは制度になる。さらに制度をゲームの均衡としてとらえることは、ゲーム理論でも容易に示せるように、均衡はかならずしもひとつであるとは限らない。比較制度分析では複数の均衡を制度の多様性として理解する。

第3章は「制度分析の応用—日本と中国の来し方・行く末」であり、比較制度分析を用いた社会経済現象の分析である。本章2節は「雁行形態パラダイム・パラダイム2.0」であり、統計データによる分析と経済史的な分析を融合させて日本、中国、韓国の経済発展の比較分析を行っている。著者はこれら三国の経済発展のパターンは非常に類似していることを主張している。本章3節は「中国と日本における制度進化の源泉」であり、日本の徳川期と中国の新朝期における制度の源泉に着目する。両国の小農経済とそれぞれの国家形

態、社会規範との間の制度的な補完性を比較し、両国が歩んできた歴史をふりかえることで制度の形成とその進化を比較、抽出する。

なお、本章には福島原発事故関連の論説も収められており、電力産業の組織形態のあり方から今後の方向性を探っている。組織形態の区分として、電力供給にかかわるシステムをモジュール（構成要素）の複合体としてとらえることで、モジュールの機能、活動をどう調整するかにより、①開放ルール、②擦り合わせ、③上意下達の3タイプを設定する。従来の電力産業は停電の頻度の低さに代表されるように、安定供給に優位性を発揮した。これは、発送配電の統合にもとづく②の擦り合わせシステムの機能によるものであった。今後は、地震に代表されるような不確実性の対処と革新において優れている①の開放ルール（オープンルール）にもとづくシステム構想が重要になると主張する。

第4章は「制度論の拓がる地平」であり、本章1節は新たに書きおろした「制度論の拓がる地平—政策、認知、法、文化的予想、歴史をめぐって」である。本論説は制度とは何かという本質論から制度と政策との関係まで扱っている。特に、制度の進化プロセスを、認知と行動、プレイヤーの内部と外部という視点から考察し、制度変化を分析するための方法論を提示している。そして、社会科学としての比較制度分析の目標は、現状分析と政策分析にあることを主張する。

また、ミルトン・フリードマンとの対話（2節「資本主義はどうなるか」）も収められており、アジア通貨危機の原因が両者の間で対照的に語られている。フリードマンは為替レートの変動制を犠牲にしたことが通貨危機の主な原因とみるが、筆者は未熟な国内の金融機関がグローバルな金融市場の発達と乖離していたことに原因を求める。フリードマンが変動相場制という自由市場の欠如、筆者が金融機関という組織と金融市場という制度の乖離を指摘していることは、両者の経済学の立場からしても興味深い。

以上が評者なりの要約であるが、かならずしも本書のエッセンスを的確に要約できたかについては、正直なところあまり自信はない。それは、比較制度分析という経済学のパラダイムをも変える壮大な体系を前に、評者が十分に迫ることができたかという疑問があるからである。そのような状況ではあるが、以下に評者が本書から感じとり、考察としてとりあげたい問題を2点

ほど提示する。

最初にとりあげるのは、比較制度分析でいうところの制度とは何かという問題である。これについては、第4章1節の論説に十分な説明があるが、実は第2章にその核心があるように思われる。前述したように、筆者はノースやウィリアムソンの制度観を批判し、制度は内生的に生じるゲームの均衡であることを強調する。制度をゲームの均衡と解釈することは、囚人のジレンマ的な現象が実際に起きること、さらには長期的な関係がお互いの共有知識 (common knowledge) として認知されれば、囚人のジレンマから脱出した均衡が生じ、その均衡が長期的に制度として機能することを矛盾なく説明できる。

ゲーム理論によれば、囚人のジレンマから脱出するためにはトリガー (引き金) 戦略のような脅しが有効になることが導かれる。しかし、そのような外生的な行動に依拠しなくとも、ゲームは一回限りではなく長期的に続くことがプレイヤーに共有されれば、共に満足を高められるような協調解に達成することも導かれる。まさに、制度は後者のようなプロセスを経てうまれる。このような観点からも、制度は外から与えられるゲームのルールではなく、内生的にうまれる均衡であることが確信できる。

次にとりあげるのは、制度はどのように進化していくかという問題である。比較制度分析は歴史の観点からも有益な枠組みであり、本書でも日本と中国の経済史的な側面に着目した論説が掲載されているのは前述したとおりである。歴史的な観点からは、制度の「経路依存性」や制度間の「戦略的補完性」という概念を用いて、それに進化ゲーム理論や認知理論を適用した制度の進化プロセスを導入し、制度の進化を分析する。

このことは、日本で終身雇用制や年功賃金制が続いたのは、両制度が戦略的補完性の関係にあり、それらは容易に変更されるものではないという説明が具体例としてあげられる。筆者は以前からバブル経済崩壊後の「失われた20年」というフレーズを嫌っており、「移りゆく30年」という考え方を提示している。なぜ30年かといえば、現在の人口状況や都市化の状況から一世代を30年として規定しているからである。筆者によれば、バブル経済崩壊や自民党の単一支配の終焉となった1993年頃を契機にして、日本は制度変化の時期に入ったとしている。現在、確かに終身雇用制や年功賃金制は減少しているが、それまでの経路依存的な状況からか、劇的な変化が生じているとはいえ

ない。まさに、制度が変革する進化の最中として理解できよう。

以上これまで評者なりの考察を示したが、これらの考察は本書の内容を批判するものではない。筆者が言うように、比較制度分析の究極的な目標が現状分析と政策分析にあるとすれば、より実態にふみこんだ分析が可能になるのではないかということを、評者なりに示唆したものである。

比較制度分析は、従来の新古典派経済学では与件として扱っていた制度に焦点を当てた。その方法論はゲーム理論が中心であるが、近年では認知理論をも視野に入れた学際的な方向にも展開している。評者は歴史的な洞察と切れ味鋭い新古典派経済学の卓越なブレンドが比較制度分析であり、経済学が照らす範囲を大きく拓げるものであることを確信している。筆者による『比較制度分析序説 経済システムの進化と多元性』（講談社学術文庫）と併せ、本書の一読をお薦めするしだいである。

